

茂木敏充衆議院議員との対談

2. 時代の変化と教育の対応

開倫塾

塾長 林 明夫

林： 今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただきましてありがとうございます。今朝の「開倫塾の時間」は、先週に引き続き、衆議院議員の茂木敏充先生をお招きして、これからの教育と人材育成、日本と海外の教育事情の現状の比較についてお話していただきたいと思います。ご承知かと思いますが、先生は科学技術担当大臣をお務めになり、その前は外務副大臣という非常に重要なお仕事をなさっておられました。先生よろしくお願い致します。

茂木： おはようございます。今日もよろしくお願い致します。

林： 先週の放送の最後に伺った、時代の変化と教育の対応についてのお話の中で、グローバル化で英語が必要であるにもかかわらず、私を含めて日本人は、それを身に付けることがなかなか大変だというお話がありました。まず、今日はそこからお話していただきたいのですが。

茂木： 先週の最後に、国際会議でも英語がほとんど国際語になっていること、そしてヨーロッパはもちろん、アジアや中国の人はものすごく英語が上手になっているのに、日本人の英語でのコミュニケーション能力は低いという話をしました。実は私、去年の今頃大臣としてフィンランドに行っていました。その機会に、フィンランドの首都ヘルシンキにある小学校も視察したんです。そこで女性の校長先生が小学校の6年生を何人か紹介してくれたんですが、驚いたのは、みんな英語がうまいということなんです。その中の一番英語が上手な子に、「君、何カ国語を話すの?」と聞いてみたら、「フィンランド語を含めて4カ国語を話します。」と言うんです。小学校6年生ですよ。話を聞いてびっくりしてしまいました。

林： それは校長先生ではなく、生徒さんですね。

茂木： もちろん、生徒さんです。さっそくその授業を見せてもらおうと教室に行きました。英語の授業は全部英語でやるんです。お隣の国のスウェーデン語の授業は全部スウェーデン語でやるんです。一方、日本は、日本語を使いながら英語の教育をする。フィンランドでは英語の教育はそのまま英語でやるという方法を取り入れており、これはイマージョン教育といってカナダなどが有名なんです。やはりコミュニケーションの手段としての英語教育がきちんと確立されているなと思います。

日本はどうして駄目なのかといいますと、文法からやるからなんです。赤ちゃんを見て下さい。日本語を文法から勉強する赤ちゃんなんていないでしょ。語学はやはり耳からです。カナダなどの国々では、「聞くことから入って次に話す」とコミュニケーションの手段として語学を

考えているのですが、日本は、江戸時代、さらにその前から、知識を習得する手段として英語・外国語をとらえてきた。杉田玄白などが「蘭学事始」や「解体新書」などを翻訳するための語学、外国の進んだ技術や文化を取り入れる手段としての外国語だったのです。かつては中国語であり、その後はオランダ語や英語であったりしたわけです。

今だに日本は、こういう習慣から抜けきっていないんです。ですから私は、「今の英語はコミュニケーションの手段」と最初からとらえ、ネイティブな英語が堪能な先生に教えてもらうのが良いと思っています。

林： そろそろ、そういう状況から脱却した方が良いということですね。

茂木： 小学校から英語教育をやっていいんじゃないかと思います。フランスは、小学校1年生から外国語教育を取り入れています。先ほど述べたフィンランドもそうですが、ドイツや韓国でも、小学校3年生から英語教育を取り入れています。やはり多感なというか耳が良い小さい頃から英語教育を始めた方が良いと私は思っています。

林： ところで、時代の変化ということでもう1つ、先生は、IT分野についてはどのようにお考えでしょうか。

茂木： 最近、ライブドアのホリエモンが非常に話題をよんでいます。やはり時代は変わってきたなと思うんですね。

私は、堀江さんとも友人ですし、楽天の三木谷さんやソフトバンクの孫さんもよく知っているんです。新興企業ですが、例えばソフトバンクの今の資産というのは4兆円なんです。これは、だいたい東京電力と一緒にですね。楽天の資産というのが1兆円、これは三菱重工と同じなんです。それだけIT革命が進み、IT企業が急成長する時代といえるんですね。

二百数十年前にイギリスで産業革命というのが起こった。産業革命は、いってみれば労働力の考え方を換え、世界中の製造業の生産コストを圧倒的に下げた。それに対して、IT革命は、流通コストやトランザクションコストというものを下げる。これがいろいろなところで社会の変化につながっていると思います。

林： IT革命で、どんなことが変わるとお考えでしょうか。

茂木： 例えば企業では、今までは商業といえば店舗を持たなければいけなかったんです。ところが、インターネットの時代というのは、三木谷さんの楽天のネットショップもそうですが、店舗をもつ必要がなくなる。ちっちゃな企業でもインターネットを使って全国展開や世界展開などが代理店無しでやれるように、企業経営も変わっていくのです。

それから、社長と社員の関係も変わるんですね。今まではピラミッド型の組織というか、社長がいて役員がいて、部長、課長、係長、平の社員がいるという企業組織でしたが、これからはインターネットで社長と社員が直結できるんです。例えば日立やソニーもそうなんです。誰でも社長にメールをうてるようになっていて、社長はそのメールを見て、社員に直接指示ができる。そうすると、中間管理職がいらなくなってしまふんです。今までのピラミッド型の組織から台形型になるというか、幹部と社員が双方行でそのまま結びつく時代が変わっていくと

思います。

私は、教育もおそらくそうなるんだと思います。先生と生徒の関係が一方通行ではなく、両方が相互に交流する。さらに言うと、単に先生が知識だけを持っていても、生徒には立派な先生だとは思ってもらえないような時代になってくると思っています。

林： インターネット時代には知識だけではダメ？ それでは先生と生徒の関係はどのようにあるべきだとお考えでしょうか。

茂木： これまでは物事を知っていれば先生は立派だと思われたかもしれませんが、しかし、今はものを知るだけだったら、ネットで検索すれば子どもだってすぐできるんですよ。昨年末、スマトラ沖で大地震が起こり、インドシナ半島に大きな津波が押し寄せました。この津波、これは英語でも“tsunami”なんです。なぜ英語でも“tsunami”になったかという、それは、1946年、今からちょうど50年前にアリューシャン列島で大きな地震が起こりまして、それによる7mから8mの波がハワイへ押し寄せました。その波をハワイの日系人が“tsunami”という言葉でよび、それハワイからアメリカ本土に伝わって英語にもなったんです。

物知りだと思うでしょう。先ほどインターネットで調べただけなんです。そんなものなんです。つまりインターネットで調べると、単なる知識や情報は誰でも簡単に入手できる時代なんです。先生がいくら教材を準備して生徒に教えようとしても、そういうことはもう生徒が自分で調べられるんです。そうすると、教える側ももっと別なもの、経験というか知恵とかを持たなくてははいけない。これが変化への対応ということだと思えます。

林： ありがとうございます。なかなか話が尽きないですね。今日の「開倫塾の時間」は、衆議院議員の茂木敏充先生をお招きして、これからの教育と人材育成についてのご提案と、特にITについてのお話をお伺いしました。先生からさらにいろいろなことを教えていただきたいので、また来週もおいでいただいてよろしいでしょうか。

茂木： はい、結構ですよ。

林： よろしくお願ひ致します。茂木先生、それから放送をお聴きの皆様、ありがとうございました。